

本日の学び テーマ：「『いと高き方の力』に包まれて」テキスト：ルカ1章26-38節

【理解の手がかりとして】

ヨハネ誕生の告知から六ヶ月目に天使ガブリエルは神から遣わされた。そこはガリラヤの町ナザレという場所、年若いおとめマリアのところであった。マリアはダビデ家に属するヨセフと婚約していた。当時のユダヤ社会においては婚約した男女は法的にはすでに実質的な夫婦と見なされていた。

マリアのところにやって来た天使は、いきなり「おめでとう、恵まれた方。主があなたと共におられる」(1:28)と語りかけた。マリアの戸惑いは推して知るべし。マリアはその言葉の意味について考え込んでしまう。戸惑うマリアに対して天使は、ザカリアの場合と同様、まず「恐れることはない」(1:30)と語りかけ、その根拠として彼女が神から恵みを与えられたことを伝え、その具体的な内容を明らかにした。すなわち、ザカリアの場合と同様、天使はマリアに対して彼女が男児を出産することを告知し、さらにその幼子に「イエス」(主は救い)と名付けるように指示したのであった。

続いて、その生まれて来る幼子の将来の働きについて天使は伝える。この幼子もザカリアの息子ヨハネと同様、「偉大な人」(1:32)となると予告されるが、「主の御前に偉大な人」(1:15)と予告されたヨハネの場合とは異なり、幼子イエスの偉大さは、ヨハネのそれとは質的に異なっていることが示唆される。このマリアの子は「いと高き方の子」(1:32)とも称えられ、ダビデの王座につき、その永遠なる統治者となると予告されたのであった。

天使によるその誕生告知に対して、ザカリアの場合と同様、マリアも最初は疑問を示す。「どうして、そのようなことがありえましょうか」(1:34)と。その疑問の根拠として、未だに男性と関係を持ったことがない点をあげる。これに対して天使は、それは「聖霊」(1:35)のわざであることを告げた。聖霊によって「いと高き方」(同)の力が彼女を包むこと、それゆえ、生まれてくる子は「聖なる者」(神のもの)「神の子」(同)と呼ばれるのであるのだと。※確かにその子はマリアから生まれるが、《聖霊によって生み出される神の子である》、これが天使の告げるマリアへの使信であり、そしてルカ福音書が私たちに伝える使信である。

さらに天使は、——ザカリアとは異なり、特にしるしを求めなかったマリアに対して——この告知の信憑性を裏付ける一つのしるしとして、すでに年老いていたマリアの親類エリサベトが身ごもってすでに六ヶ月になっている事実を明らかにした。そして最後に天使は、「神にできないことは何一つない」(1:37)と断言することにより、マリアに最終的な確信を与え、彼の話を締めくくった。

天使の言葉に対するマリアの最後の言葉は、「わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身になりますように」(1:38)だった。マリアは天使によって示された神の意志に対する完全な服従を示したのである。

このクリスマスアドヴェントにおいて、私たちのとるべき態度を、母マリアははっきりと示してくれている。それは「わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身に成りま

すように」という素直さである。クリスマスは天からやってくる出来事。私たちはそれをただ受け取ること、そしてそれを引き受けていくよう招かれている。天使ガブリエルはマリアに向かってこう告げた。「おめでとう、恵まれた方。主があなたと共におられる」（ルカ 1:28）。同じように、クリスマスを迎える全ての者に対して天使はこう告げている。「おめでとう、恵まれた方。主があなたと共におられる」と。

マリアへのイエスの誕生告知は、ほかならぬ私たち一人ひとりへの「イエスの誕生」（キリスト信仰）への招きでもある。パウロは言う。「わたくしの子供たち、キリストがあなたがたの内に形づくられるまで、わたしは、もう一度あなたがたを産もうと苦しんでいます」（ガラテヤ 4:19）と。・・・クリスチャンとして歩んで来られた方々は、それぞれに、御自身の内にキリストがお生まれになった日のことを思い出してほしい。

私は自らの最初の信仰告白（バプテスマの時）を都度振り返るようにしている。人は惰性に陥りやすいもの。だから、常にそれを「新しく」更新することが大切。パウロは「もう一度あなたがたを産もうと」ガラテヤの信徒たちに言葉を尽くした。それにはガラテヤの人々が直面していた状況（キリストの福音から引き離そうとする勢力）があったからである。それと同じような状況を私たちも経験する。私たちを福音の恵みから引き離そうとする力は、色々な形でこの世には絶えず働いている。

「キリストがあなたがたのうちに形づくられる」——これは、キリストによって啓示された「まことの神」への信仰が、確固たる存在として私たちの内に形成されることである。クリスマスアドヴェントに際して、その信仰をそれぞれに思いめぐらし、確認し、確信したいものである。

## ■ 聖書教育より

「クリスマスは、人間的には腰が引けてしまうような状況において、『いと高き方の力』に包まれて歩む幸いを私たちに指し示します。」（聖書の学び～「いと高き方の力」に包まれて）

「それぞれが経験した『神の召しと、恵みや励まし』をぜひ分かち合ってみましょう。」（大人クラス）